

前唐院の起源には2つの説がある。一説には最澄の弟子、円仁（えんにん 794 - 864）の住坊であったと伝えられる。また一説には、円珍（えんちん 814 - 891）が円仁の学業を顕彰するために創建したともいわれている。

唐院とは唐に渡った僧の住居のこと。比叡山には前唐院と後唐院の2つの唐院があり、前者は円仁の、後者は円珍のためのものである。先に唐を訪れたのは

円仁で、そのため円仁の住居は前唐院と呼ばれ、その後に唐を訪れた円珍の住居は後唐院と呼ばれる。

延暦寺の開祖最澄は、中国天台宗から仏法の血脈を直接授かった上で比叡山の仏教を確立したいと、桓武天皇へ渡唐の望みを奏上。勅許が下り、延暦二三年（804）に唐に渡り、中国全土を巡る八カ月間の求法の旅を終えて帰国した。天台、禅の教えを学び、密教の灌頂を受け、数多くの典籍類を持ち帰ったが、密教に関しては、ともに唐に渡り、最澄の二年後に帰国した空海（くうかい 774 - 835）には及ばなかった。

最澄が弘仁13年（822）に56歳で入寂した後、弟子らの願いは密教について十分な典籍類を請来することであった。円仁は承和二年（835）、42歳の時に入唐の勅許を受け、同五年（838年）に唐に渡り、14年間にわたる行脚の末、八百二巻の経疏類、曼荼羅、仏舎利、仏具等を持ち帰った。千辛万苦の末に成し遂げたこの入唐の旅は『入唐求法巡礼行記』としてまとめられた。前唐院には請来の典籍のほか、円仁の真影も安置され、御影堂としての役割も果たしている。